

日本中国學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一五年(平成二十七年)十二月二〇日
第二號(通卷第二十八号)



●目録

巻頭言

- 〇二 新しう学会と日本中国学会の意義
土田健次郎
- 〇四 第一回「辟雍論壇」
国際学術研究会に参加して
古勝 隆一
- 〇六 日・中・米の学術交流
——東京大学東洋文化研究所の試み
大木 康
- 〇八 第九屆漢文仏典語言学国際学術研討会暨
第三屆仏経音義国際学術研討会参加報告
玄 幸子
- 一〇 各種委員会報告
大会委員会／論文審査委員会／出版委員会／
選挙管理委員会／広報委員会／将来計画委員会
- 一三 日本中国学会二〇一四年度平成26年度収支決算書
- 一四 日本中国学会二〇一五年度平成27年度予算書
- 一五 学界展望へのご協力(資料提供)のお願い
- 一六 二〇一五年度会員動向
- 一七 二〇一五年度新入会員一覧
- 一八 事務局からのお知らせ
「国内学会消息」についてのお知らせ
- 一九 「日本中国学会報」論文執筆要領
- 二〇 「次世代シンポジウム」についてのアンケートのお願い

編集●九州大学文学部 静永 健

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

メールアドレス: shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp

発行●日本中国學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3251-4853

メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

新しい学会と 日本中国学会の意義

理事長
土田健次郎

今年度の大会での哲学・思想部門の発表数は文学・語学部門に比してかなり少ない。日本漢学部門の約半数が思想関係なのでこれを足しても往事に及ぶべくもない。ただこの方面の研究の重要性が減っているわけではない。外国思想としての中国思想研究の意義はもとよりあるが、それとともに中国思想との関わりは我々にとって宿命とも言えるものであって、日本思想を考える際にもそれと向き合うことは必須である。

特に儒教の場合は日本に対して具体的な教説の内容のみならず、思想表現の形式と語彙をもたらしただけであって、日本における思想表出を豊かにし、時には規制したという意味でも、とりわけ重要な研究課題である。

日本を含めた儒教文化圏が言われる一方で、津田左右吉は儒教は日本に入らなかったと言ったが、そう断言した背後には日本のみならず中国の膨大な学殖があった。津田は、自信作として日本関係の著作以上に『道家の思想と其の展開』と『左伝の思想的的研究』を挙げている。

私が早稲田大学の学生時代に所属した専修の名称は

「東洋哲学」で、実質的には津田が創始者であった。津田は『古事記』や『日本書紀』を文献批判した単なる実証的史学者ではなく思想史家であり、史学科から哲学科に移籍して、既にあった東洋哲学専攻科に所属した。当時の東洋哲学専攻科では中国思想担当の教授として遠藤隆吉が在籍していた。遠藤は当時としては画期的な『支那哲学史』を著したが、むしろ日本における社会学の草創期の一人として知られている。遠藤はそのうち大学を去り、自らが創立した巣鴨学園の育成に努め、大学にその学統は残っていない。

「東洋」という概念は成立しないという主張の持ち主であった津田はこの東洋哲学専攻科という名称に不満であった。そこでこれを支那哲学専攻科と印度哲学専攻科に分け、ついには前者を支那哲学専攻科とした。ところが津田が『古事記』、『日本書紀』の文献批判を告発された裁判、いわゆる「津田事件」によって大学を退職した後、哲学科では他専攻科との並びが悪いというので東洋哲学の名称にもどしたのである。津田の直弟子である三人の教授に学んだ私は、「東洋哲学専修に入って東洋哲学が成り立たないことを学ぶのか」などと生意気なことを思ったものである。

いずれにしても各地域の儒教を研究する場合、その異同を明らかにするために他地域を視野にいれざるをえない。広く東アジア（ここではヴェトナムも含む）を見渡した儒教研究は、外国では近年活気を見せている。その海外では、古代から儒教が根を張ってきた日本には当然全国規模の研究者の組織があると見ている。それゆえ様々な学会やシンポジウムの誘いが日本に向けて寄せられる。以前は中国、台湾、韓国が中心であったが、近年はシンガポールやアメリカからのものもある。ところがそれらの情報はともすれば個人レベルで止まってしまい、研究者の間で共有するには至っていない。つまり受け皿となるよい組織が無いのであって、儒教研究の学問交流の輪に日本は入りそこなっているかに見える。

以前は日本の中国学は受け身でもそれですんでいた。しかし近年は次第に蚊帳の外になりつつある。興膳宏元本学会理事長は、『学会便り』2002年第2号で「日本シノロジーの位置」の題のもとにフランスの学界との距離が開

いていることを懸念された。アメリカの大学でも以前は日本の研究書を読むための日本語講座があったのが今は消えたりしている。我々はこちらから努力して国際的な研究の場に入っていき、必要があり、それは翻って我が国における斯学に対する評価を是正するのにも貢献するであろう。

私は以前から中国、日本、琉球、朝鮮、ヴェトナムの儒教を横断的に研究する学会があるとよいと思っていた。先に述べた国際交流の問題もあるが、何と言ってもこれら各地域の儒教研究者が所属する学会が異なるため一堂に会する機会が極めて少ないことが第一の理由である。私は中国と日本の儒教の両方を中心に研究してきたので、日本中国学会や東方学会、中国社会文化学会、日本道教学会以外に、日本思想史学会などにも所属してきた。おかげで中国、日本、琉球の儒教についての新たな学説や情報を得る機会に恵まれてきたが、朝鮮、ヴェトナムの儒教となると、関心はありつつもその方面の研究者と恒常的に接する機会は多くはなかった。もちろん韓国で開催される朝鮮儒教の国際シンポジウムに出席し発表することも無かったわけではなかったが、断続的であっておのずと限界があった。

更に現実的な問題としては、儒教を研究する若手の研究発表の場が少ないということがある。文学などと比較して思想関係はもともと多くないのであるが、特に儒教に関してはそれが著しい。中国儒教以上に日本儒教研究の若手は発表の場を探し回っている状況である。

かかる考えを以前から周囲に漏らしてはいたが、酒飲み話に終わり、生来の怠惰ゆえ組織造りに向けて歩み出すことは無かった。北海道大学の佐藤鎌太郎教授は陽明学会の設立を力説していたが、私は賛同しながらもそれなら朱子学会も必要になるから、儒教学会を造りその一部門としてあった方がよいなどと勝手なことを言うのに止まっていた。それが私たちよりも年代が下の気鋭の研究者たちが動き、日本儒教学会として急に実現に向かい始めたのである。おりしも今年度は私の本務校が日本思想史学会の大会開催校となり、準備会代表を拝命するはめになったのも天与の好機なのであろう。なおこの計画を日本思想史研究者に伝えたところ、かなりの賛同を得ている。

人文学の危機が叫ばれている。ただ人文学の存在価値を意義づけるのもけっこうだが、それ以上にまず具体的な研究成果を出すことが先決なのは言うまでもなく、日本中国学会もそれに対し環境を整備していかなければならない。今まで新学会の話をしてきたが、振り返って日本中国学会の特色は儒教といった一分野に限らず、広く中国に関係する文学、語学、思想を横断的に取り上げていることにある。この方面の全国の研究者の多くが加入しているということはたいへんな財産である。それに今、文化交流、表象、メディア、歴史という分野の充実も図るべきだという声も上がっている。日本中国学会の持つかけがえのない使命もこれを機に再認識することが必要であろう。



第一回「辟雍論壇」 国際学術研討会に参加して

京都大学
人文科学研究所
古勝 隆一

今から8年ほど前のこと、2007年7月、上海で開催された「伝統中国研究国際研討会」に参加したのが、わたくしが中国大陸の研究集会で研究発表したのははじめです。それ以前、台湾においては二度ほど発表しただけでしたが、中国大陸には留学した経験すらありませんし、研究発表ができるなどとは、当時は思いもよがりません。しかし、せっかく声をかけていただいたので、急ごしらえの中国語論文を書き、なんとか発表することができました。恩師である台湾、中央研究院歴史語言研究所の陳鴻森先生に、紹介の労をおとりいただき、上海社会科学学院にその頃いらした虞万里先生(現、上海交通大学)が招待状を送ってくださったのでした。その時の経験は、質疑応答の内容を含め、今もくっきりと記憶にのこっています。

その後、清華大学の彭林先生の知遇を得てからは、毎年のように、経学に関する研討会(「中国経学国際学術研討会」など)にお誘いいただき、この方面の世界水準の学問に触れ続けることができるようになりました。それ以外にも、時には小学・歴史学・法制史、はたまた漢学著作の翻訳に関する研討会などにも、機会をとらえては参加します。

一年に一度か二度は必ず中国・台湾において、自分で中国語を用いて書いた論文を宣読することをみづから課し、今日に至っております。

中国で開かれる研討会では、一流の学者たちの学問に触れることができ、また、若く優秀な研究者の話を聴く機会にもめぐまれ、毎回、学ぶことが非常に多いと感じております。わたくしは中国の生きた姿を感じるべく中国学を学ぶ者ですから、このような機会を与えられてきたのは、本当にありがたいことです。

さて今秋、またも彭林先生のご紹介で、北京にて研究発表することができました。2015年9月26日から28日にかけて、北京の孔廟和国子監博物館にて開催された、第1回「辟雍論壇 一礼楽天下」国際学術研討会に参加したのです。

雍和宮の西側に位置する孔廟・国子監は、元代から続く由緒正しい場所で、歴代の進士題名碑や乾隆石経、美しい辟雍などの古建築が立ち並ぶ文化遺産ですから、お出かけになった方も多いことでしょう。わたくしも十数年前に、千葉大学の内山直樹氏とともに見学したことがあったのですが、その後、2005年に大改修されたとのことで、今回は面目を一新した孔廟と国子監とを目の当たりにすることができました。

彭林先生からは、「研討会に先立って古代の射礼を復元した儀礼を行う。また研討会の後には積奠礼も行われるので、参加しないか」と、お誘いいただいております。以前、南朝の積奠について論文を書いたこともあり、孔子を祭る儀礼には大いに関心がありましたし、また、彭林先生が力を入れていらっしゃる、古礼の復元を一度拝見したいものと思っていたので、これは願ってもない機会でした。

孔廟和国子監博物館が、儒教の普及活動をはじめ、さまざまな文化事業をしているのは今回はじめて知ったことです。この9月末の日程も幾つかの活動を含むものでしたので、順を追って記します。

まず26日の午前、孔廟の大成殿の前庭において、彭林先生の監修による射礼が披露されました。儀礼に参加したのは、数十人にも及ぶ清華大学の学生諸君からなる一団。中には射の全国大会にて優勝を果たした男女の選手も含まれていた、とか。射礼は中国では長く失われていた儀礼ですから、衣装や弓矢の復元にはじまり、音楽から、ひとつひ

とつの所作にいたるまで、すべて彭林先生が綿密に研究してよみがえらせたもので、大いに見応えがありました。それに引き続き、孔廟和国子監博物館による、成人を祝う、冠礼が行われました。こちらは古礼を復元したのではなく、古服を身にまといつつも現代めいた儀礼でしたが、はるばる江西省の吉安(欧陽脩の本貫)から招かれて参加した数十組の親子が祝福を受け、感動した様子でした。

午後には、孔廟の西隣に位置する国子監に場所をうつし、研討会の前半が開かれました。辟雍の北に新しく築かれた彝倫堂での会議は、気の引き締まるものでした。今回の副題は、「礼楽天下」と名づけられておりましたので、それぞれの発表者は礼に関わる考えをおのおの開陳しました。彭林先生も「周公制礼作樂の歴史貢献」と題してお話をなさり、わたくしも用意してきた論文『『論語』郷党“立不中門”皇疏考正』を読み上げました。会議は必ずしも前近代の礼に関する学術研究のみ、ということではなく、礼の現代的な意義、あるいは普及に関する問題などもあわせて議論されました。

翌日27日の午前には、我々の宿舎でもあった寧夏大厦の会議室において、研討会の後半が行われました。前日に引き続き、礼に関する発表ならびに質疑応答が行われました。『北京晩報』のベテラン記者、劉一達氏が、「老北京規矩」、すなわち北京の伝統的なしきたりを生き生きと紹介されたのが印象的で、古書の中だけで語られがちな礼が、別の角度から照らし出されたように思われました。質疑応答も大変に活潑で、研討会は盛会のうちに終了しました。午後は、

博物館の方が孔廟・国子監を案内してくださり、また、この日の夜はちょうど中秋節に当たり、それに合わせた音楽の集いが国子監で催されたのも、よい記念になりました。

そして最終日の28日、「祭孔」、つまり孔子をまつる積奠の礼が執り行われました。あいにく小雨の中の積奠でしたが、伝統的なしつらえの中、大成殿の前に列をなした貴賓たちが、初献・亜献・終献と順序立って大成殿に上がり、孔子とその弟子たちに酒を献上しました。伝統ある北京の孔廟での儀礼は、数多くの参列者に見守られ、なんとも厳かで、中国における生きた儒教をはっきりと見る思いでした。

こうして、三日にわたる儀礼と研討会とが終わりました。研討会について言うと、わたくしの発表した論文は少し専門的に過ぎたようですが、それは、海外から参加されたロバート・チャード先生(オックスフォード大学)、朱全安先生(千葉商科大学)のご夫妻も同じです。一方、中国側の発表者には、生きたものとして礼をとらえようという、現代的な視点が鮮明にありました。その点、これまでわたくしが参加してきた経学の研討会とは趣が異なりましたが、こちらはこちらで学ぶことが多くありました。中国側の参加者から、「礼儀之邦などと言ったところで、それは過去のこと。過去と現在との間に深刻な断絶がある」との意見がしばしば聞かれたのが印象的で、伝統に向き合う彼らの切実さを感じました。

儀礼と研討会とが、一貫したものとして開催された三日間。中秋の北京の空気に包まれ、礼に思いをめぐらすことができました。



射礼に臨む若者たち



積奠の様子

日・中・米の学術交流 — 東京大学東洋文化研究所の試み

大木 康
東京大学

第四回が東京で開催され、今年2015年には上海の復旦大学で開催の予定である。

最初の三回は、「世界史」を共通のテーマとして、それぞれ「世界史／グローバル・ヒストリーの文脈における地域史：文化史における事例研究」「世界史／グローバル・ヒストリーにおける東アジア」「せめぎあう「世界史」—中国、日本、アメリカの視点から」と銘打って、二日間にわたるシンポジウムが行われた。二巡目は「画像」を共通のテーマとし、昨年は「文学、宗教と画像」、今年は「東アジア文化交流史における文学と画像」がテーマとなる予定である。

この会では第一回から、発表・討論を日本語、中国語、英語の三カ国語で行うことにしている。グローバル時代といい、国際化といい、何でも英語・中国語でやればいいという風潮ではあるが、どうしてもこれら言語から漏れる人が出てくることも事実である。そういった不利がおこらないよう、同時通訳を用いて、三カ国語で行うことにしたのである。かくして、外国語で議論する時の隔靴搔痒の感を多少なりとも克服することができているのではないかと思う（同時通訳にお金がかかるのが難点）。充実した内容の討論が行われてきたことが、この会がずっと続いてきた重要な理由であろう。

なお、最初三回分の発表論文の中から論文集が編まれ、まずは日本語版、中国語版が近いうちに出版される予定である（英語版も刊行予定）。

昨年東大山上会館で開催された第四回のプログラムは、大略以下のようである。

12月15日

●第一部 司会：葛 兆光（復旦）

Thomas Hare（プリンストン）：Text and Image in Chan and Zen Portraiture

鄧 菲（復旦）：形式と含意の多元化—両宋考古資料中の十二支像の分析

コメンテーター：Brian Steininger（プリンストン）

●第二部 司会：Benjamin Elman（プリンストン）

Brian Steininger（プリンストン）：“Vernacular” Poetry in Heian Japan

榎屋友子（東文研）：大モンゴル「シャーナーメ」写本の挿絵を読む

コメンテーター：鄧 菲（復旦）

東京大学東洋文化研究所では、復旦大学文史研究院、プリンストン大学東アジア学部（Department of East Asian Studies）との間で各種の学術交流を進めている。

この三校による交流がはじまったのは、2010年、文史研

究院の葛兆光院長、東アジア学部のベンジャミン・エルマン主任、東洋文化研究所羽田正所長の間で、学術交流協定が結ばれたことにはじまる。交流には、協定締結後にはじめられたものも含め、いくつかの具体的な項目がある。それは、

- ①三校による共同シンポジウム
- ②復旦大学におけるサマーセミナー
- ③復旦大学との間の研究員の相互派遣
- ④復旦大学との間の大学院生によるワークショップの開催
- ⑤プリンストン大学との授業交流（サマーセミナーも含む）の五つである。

三校によるシンポジウムは、毎年12月に開催され、第一回が2011年に東京で、第二回が2012年に上海で、第三回が2013年にプリンストンで、そして2014年には、二巡目の

●第三部 司会：羽田 正(東文研)

李 星明(復旦)：墓中の仏塔——六朝時代における死後の世界観の転換

張 佳(復旦)：礼制と葬俗の相互作用——明代壁画墓衰退の原因

板倉聖哲(東文研)：「文姫帰漢図」の変容——画とテキストの関連から

コメンテーター：平勢隆郎(東文研)

12月16日

●第四部 司会：楊 志剛(復旦)

Martin Kern(プリンストン)：Made by the Empire: Wang Xizhi's *Xingrangtie*

大木 康(東文研)：画像資料から考える中国明清の歌唱文化

コメンテーター：李 星明(復旦)

復旦大学文史研究院において、毎年六月末、「宗教、歴史と芸術」のテーマでサマーセミナーが開催されている。全体として十日間にわたり、六名の講師が講義を行い、復旦から二名、プリンストンから二名、東大から二名の講師を出すことで、共同のサマーセミナーが運営されている。筆者も三回、この講師をつとめたが、3時間にわたる講義と質疑、さらに夜にも行われる討論の間、欧米や中国、また日本、韓国などから参加した優秀な大学院生たちから、次から次へと途切れることなく質問が続き、なかなか充実した時間である。今回の講師は、Martin Kern、顔娟英、Benjamin Elman、大木康、川原秀城、王国斌の六名であった。一日、午前午後二つの講義が行われた翌日には各



復旦大学におけるサマーセミナー

種の参観行事が準備されており、今年は、上海博物館、嘉定孔廟、徐家匯天主堂ほかの参観が行われた。今年日本からは、京都大、広島大、東京大からの大学院生が参加した。毎年、復旦大学文史研究院のホームページに、募集の案内が掲載されるので、日本の大学院生のみならずにもふるって参加してもらえればと思う。みなさんが将来世界で戦わなければならない相手は、まさしく彼らなのである。なお、言語は原則として中国語である。

復旦大学文史研究院と東洋文化研究所との間では、さらに研究員の相互訪問が行われている。毎年それぞれ二名ずつ、約一ヶ月の期間、相互の機関を訪れ、セミナーを行うなどの交流を行っている。今年、復旦大学からは、王鑫磊、許全勝の二名が七月に訪れ、報告を行っている。

学術交流が長続きし、実質的な意味を持つためには、やはりお互いよく知っていることが重要であり、こうした短期の相互交流は、学術交流の基礎になっている。

さらに昨年度は、プリンストン大学のエルマン教授を、半年間、東洋文化研究所の客員教授としてお迎えし、大学院の講義を行っていただいたし、今年は復旦大学の葛兆光教授を、三ヶ月間やはり客員教授としてお迎えしている。筆者も、復旦大学の訪問学者として、しばしば復旦を訪れ、学術交流を行っている。

プリンストン大学と東京大学の間には、戦略的パートナーシップの協定が結ばれ、その枠組みを通じて、教員学生の授業交流も行われている。東洋文化研究所の教員がプリンストン大学東アジア学部に出向いて講義を行い、東大の学生がプリンストンで講義を受け、さらにプリンストンの学生と教員が東大に来てサマーセミナーを行うなど、学生の授業交流が行われており、交流はさらに広がり深まりを見せている。

交流協定を結んだ当時の文史研究院の葛院長は、楊志剛院長に代わり、プリンストン大学のエルマン主任は、マルティン・カーン主任に代わり、東洋文化研究所の所長も、羽田所長から筆者大木、さらに高見澤磨所長へと代替わりしたが、いずれもこの三校の交流を継続深化したいとの思いは変わらず、今後将来にわたって続いて行くであろう。

日本で行われるシンポジウム(次は2017年になる)、また復旦大学で行われる大学院生のサマーセミナーは、どなたでも参加できるので、ふるってご参加いただければ幸いです。

第九届漢文仏典語言学 國際學術研討會暨 第三届仏經音義 國際學術研討會參加報告

玄 幸子
關西大学

北海道大学の松江崇氏のお誘いを受けて8月25、26日の2日間にわたり北海道大学で開催された表題の国際学会に参加した。漢文仏典語言学国際學術研討会は2002年に台湾嘉義の中正大学で第一回が開催されて以後九回目の開催、仏經音義國際學術研討会は2005年9月に上海師範大学にて第一回が開催され今回は第三回目の開催である。いずれも会場が日本で開催されたのは初めてのことである。論文発表者47名、発表件数45件、そのうち海外からの参加者が37名(大陸25名(含香港2名)、台湾7名、韓国4名)、国内からの参加者は13名(含国内機関所属中国人研究者)の国際学会の名に恥じない大規模な学会であった。参加者と発表論題を時系列に沿って紹介すれば次の通りである。



25日 10:40-12:00

- 分組學術交流[1A組]主持人：徐時儀、李圭甲
 1. 竺家寧：玄奘和慧琳『音義』濁音清化与来母接觸的問題
 2. 丁 鋒：神珙本五音図の性質
 3. 張渭毅：慧琳『一切經音義』重紐B類普通三等化、重紐A類純四等化趨勢的調查研究
 4. 李建強：從于闐文咒語對音看武周時期北方方音
- 分組學術交流[1B組]主持人：鄭賢章、朱冠明
 1. 方一新、王雲路：中古漢訳仏經詞語4則札記
 2. 蕭 紅：中古宗教名詞“玉女”考
 3. 張春雷：“支昂”“丹枕”考弁
 4. 梁英梅：現代韓國語中的仏源詞滙

14:30-15:50

- 分組學術交流[2A組]主持人：董志翹、趙家棟
 1. 李圭甲：『可洪音義』校誤八則
 2. 金愛英：『可洪音義』誤謬考
 3. 賈 智：關於『新訳華嚴經音義私記』中的漢字字体—漢字字体規範數拋庫応用事例
 4. Lee, Jiyoung: The Sound System of Kehong Yinyi
- 分組學術交流[2B組]主持人：雷漢卿、曾昭聰
 1. 朱慶之：試論漢語嘆詞“喂”的早期用例和可能来源
 2. 趙長才：中古漢訳仏經交互、相互義的表達形式及其来源
 3. 陳淑芬：梵文複合詞之研究：以『金剛經』為主
 4. 邵天松：從漢字從漢訳仏典看漢語量詞重疊式的始見年代及其起源

16:10-17:30

- 分組學術交流[3A組]主持人：張渭毅、李建強
 1. 徐時儀、肖秀琳：仏經音義引『桂苑珠叢』考
 2. 俞莉嫻：『慧苑音義』日本写卷版本源流考
 3. 李福言：『広雅疏證』引『玄奘音義』考
 4. 潘牧天：日本古写玄奘『一切經音義』卷六考辭
- 分組學術交流[3B組]主持人：王建軍、高列過
 1. 朱冠明：“被”的語法化与“被 NV”的形成
 2. 姜黎黎：中古訳経“偷盜”概念場詞彙系統中含同一語素單双音節動詞的考察
 3. 楊安娜：從認知角度試論『六度集經』中“皆”与“都”的語義功能
 4. 李博寒：漢訳仏典中的誤訳拳隅一兼談“漢訳仏經梵漢對比分析語料庫”在漢訳仏典語言学研究中的作用

26日 10:40-12:00

●分組学術交流[4A組]主持人：方一新、蕭紅

1. 盧烈紅：禪宗語録中轉移話題式複句の發展
2. 江俊龍：『仏説薬師如来本願経』与『薬師琉璃光如来本願功德経』介詞比較
3. 周碧香：從『祖堂集』談「个」的語法化与詞彙化一兼論与「底(地)」的關係
4. 王玥雯：從仏経材料看中古“未是”否定判断句的形成和發展

●分組学術交流[4B組]主持人：竺家寧、丁鋒

1. 梁曉虹：日本中世“篇立音義”研究
2. 玄幸子：『參天台五臺山記』顯現出的宋代渡華日僧語言活動実況
3. 松江崇：試談仏経音訳字の表詞現象及其制約性—以“閔”字為例—
4. 張 涛：“人間”、“畜生”、“餓鬼”在漢日語的語義演變

14:30-15:50

●分組学術交流[5A組]主持人：朱慶之、趙長才

1. 董志翹：日本七寺、金剛寺、興聖寺古写本仏教類書『経律異相』の異文考察
2. 趙家棟：仏教類書与所出原経平行対応語料庫建設与研究
3. 林家妃：上海博物館藏支謙訳『仏説維摩詰経・卷上』写本字様研究
4. 李乃琦：図書寮本『類聚名義抄』与玄応撰『一切経音義』

●分組学術交流[5B組]主持人：陳淑芬、周碧香

1. 雷漢卿：『葛藤語箋』商兌
2. 曾昭聰：仏典“幻”類詞研究
3. 鄭賢章：漢文仏典疑難字考
4. 孔品淑：漢語詞彙与漢訳仏典詞彙の互渉—以謝靈運詩為研究对象

16:10-17:20

●分組学術交流[6A組]主持人：梁曉虹、玄幸子

1. 池田証壽：仏経音義与日本古字書[同声翻訳30分 鐘]
2. 林寺正俊：日本古写経中の新出資料『三法度論』について[同声翻訳]
3. 李 媛：關於利用日本資料的『篆隸萬象名義』の本文研究—以《大乘理趣六波羅蜜經积文》為中心—

●分組学術交流[6B組]主持人：盧烈紅、江俊龍

1. 王建軍：仏典成語与禪籍成語異同論
2. 高列過：基于成語運用特点的中古早期漢訳仏経語体屬性考察
3. 高婉瑜：影響禪義成語形成与發展因素初探

以上、2つのセクションに分かれて、10:40~17:30前後に研究発表が行われた。時間のみをみるとゆったりした時間の組み方のように見えるが、初日は開幕式、写真撮影、韓国延世大学校李圭甲教授からの書籍贈呈、最終日は蕭紅・朱冠明のお二人によるA、B各セクションの総括、主催者ほか関係者による大会の総評とコメント、参加者からの意見、感想、謝辞など自由発言もかなり熱の入った様相を呈していたので、両日とも実質はかなり充実した時間を過ごした実感がある。

大会全体を通じて今回とりわけ印象に残った点は、まず、若い研究者たちの研究が注目され高い評価を得ていたことである。博士課程2名、修士課程1名の発表があり、研究職に就いたばかりの若手も多く、研究手法の新しさもさることながら、語学力(日本語・英語)の高さも評価されていた。次に注目されるのは研究対象に日本の資料が多く取り上げられていたことである。ところが、もう一度論文発表者を確認すると却って日本(人)の学者の参加者があまりに少ないのは、とても残念である。ただ、主催者として最大限の尽力をされた松江氏はじめ、林寺正俊、池田証壽の両先生がたの参加は北海道大学の研究者の層の厚さを如実に示すものとして深く印象に残った。石塚晴通北海道大学名誉教授もまた大会の期間終始各発表に熱心に耳を傾けておられたが、その姿に感銘を受けたというコメントが参加者から寄せられていたのも記憶に新しい。

国際学会を日本国内で開催するのは、諸般の困難が伴う。主催校はとりわけスタッフの少なさに頭を悩ませることが多いだろう。しかしこの学会では広い構内を道に迷わないように案内するスタッフが処々に立ち、昼食の手配やら、会場の設置、あらゆるところでスタッフの細やかな気配りが感じられた。よくこれだけの人数のスタッフを揃えたものだと感心させられた。これも北海道大学の大きな強みだろう。筆者は参加しなかったが、27日最終日のエキスカージョンの手配なども夏の観光シーズンに大変だったろうと推察された。

来年は中国人民大学(北京)で開催される予定だということである。同学会の今後のますますの發展を祈りつつ、日本国内での国際学会開催の機会がさらに増えることを期待したい。

❖ 各種委員会報告

大会委員会

委員長 赤井 益久

1) 第67回大会について

平成27年度第67回大会は、平成27年10月10日(土)および11日(日)の両日にわたって、國學院大學渋谷キャンパス130周年記念五号館(東京都渋谷区東4-10-28 赤井益久代表)において開催されました。久しぶりに首都圏で開催されたこともあって延べ840名ほどの参加者を得ました。思想哲学部会、文学語学部会、日本漢文部会の三会場に分かれて、37件の研究発表が行われ、活発な質疑があり、実り多い成果が上がった大会となりました。懇親会にも150名ほどの会員が出席され、親睦を深めることができました。アンケートをもとに試行的に実施しました「託児」(キッズコーナー)も利用者を得て、一定の成果がありました。

2) 平成28年度第68回大会について

明年度、日本中国学会第68回大会は、平成28年10月8日(土)・9日(日)の両日にわたって、奈良女子大学(奈良県奈良市北魚屋東町 野村鮎子代表)において開催されます。ちょうど観光シーズンとも重なりますので、早めに宿泊施設の予約を取るようお願いいたします。

3) 「次世代シンポジウム」の在り方について

理事会において、土田健次郎理事長から、これまで2回開催されました「若手シンポジウム」「次世代シンポジウム」の在り方を、(1)従来のように日時を変えて大会とは別に開催する、(2)あるいは大会の一部門として大会のプログラムに組み入れるなど、大会開催校の意向を踏まえて検討するように指示されました。

詳しくはこの「日本中国学会便り」第20頁のアンケートのお願いをご覧ください。

論文審査委員会

委員長 大木 康

○10月10日の論文審査委員会

- ・学会報第68集の審査日程を確認した。
- ・掲載が決まった論文の印刷校正段階において、大幅な修正を加え、規定の頁数を超過するに至ったケースがあったむね、出版委員会より報告を受けた。論文審査委員会としては、投稿論文受領段階、掲載決定論文の修正段階、並びに印刷校正段階における規定枚数超過については、厳正に対処することを確認した。

2016年1月20日締切(消印有効)の第68集の投稿に当たっては、この「日本中国学会便り」第19頁に掲載されている「論文執筆要項」を熟読の上、執筆、投稿をお願いしたい。

- ・再来年刊行予定の第69集(2017年1月締め切り)より、投稿原稿の締め切りを、現行執筆要領の「1月20日までの消印のあるものを有効とする」から、「1月15日までの消印のあるものを有効とする」へと変更する(これについてはすでに理事会の議を経て決定した)。第69集に論文投稿を予定されている方は、その点をお含みおきのうえ、準備いただくようお願いしたい。

なお、来年(2016年)刊行の第68集については、従来通り「1月20日までの消印のあるものを有効とする」である。

出版委員会

委員長 釜谷 武志

第1回出版委員会を、7月26日に神戸大学で開催しました。学会報に掲載する学界展望のコメント原稿を、哲学・文学・語学の三部門にわたって検討しました。

第2回の委員会は、10月10日、國學院大學での学術大会の1日目に開きました。主な内容は以下のとおりです。

○学会報掲載論文の体裁について

論文で引用される文献に関する表記が、執筆者によって不統一のままになっている。できるだけ統一をはかるために、表記のしかたについての原案を出版委員会で作成して、論文審査委員会、研究推進・国際交流委員会、将来計画委員会と連携しながら、執筆要領に入れるようにする。

○学界展望の中国語訳・英語訳について

学界展望を中国語と英語に翻訳して、学会ホームページに掲載し、日本における中国学の研究成果を情報発信することを検討する。研究推進・国際交流委員会とともに、展望の執筆を誰が担当するか等の問題も含めて考えることになった。なお、学会報第68集から、学界展望の分担執筆者名を目次にも掲載することになった。

○校正作業について

学会報第67集の校正作業において、PDFを併用することで効率化を図り、例年よりも早く刊行することができた。第68集からは、初校は出力紙とPDFを併用して行うが、再校はPDFのみにすることが了承された。

○抜き刷りについて

論文等の抜き刷りは、今年の第67集からPDFで執筆者に配布することになった。紙媒体での抜き刷りを希望する執筆者は、自費でサンセイ等の印刷所に作成を依頼する。

抜き刷りのPDF化にともなって、昨年決定したばかりの、学会報論文部分を奇数ページ起こして版組みする案は、取り止めとなった。

2016年10月刊行予定の学会報第68集にも、学界展望を掲載します。その基礎資料となる文献目録(学会ホームページに掲載)を作成するために、著書・論文等のデータを収集しています。2015年1月～12月の1年間に発行された論文等の情報をお知らせ下さい。

〔哲学部門〕 湯浅 邦弘 会員(大阪大学)

電子メール: nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

〔文学部門〕 釜谷 武志 会員(神戸大学)

電子メール: nihonchugoku.bungaku@gmail.com

〔語学部門〕 森賀 一恵 会員(富山大学)

電子メール: nihonchugoku.gogaku@gmail.com



❖ 各種委員会報告

選挙管理委員会

委員長 松原 朗

10月10日に、大会開催中の國學院大學において、本年度第1回選挙管理委員会を開催した。そこで来年度実施される評議員選挙、理事長選挙、監事選挙の日程を審議し決定した。その結果、評議員選挙は来年の6月初頭から7月初頭にかけて、理事選挙は同じく7月初頭から7月末にかけて、監事選挙は同じく10月の大会開催中の評議員会の時となった。なお今年度いっぱいまで評議員定年もしくは辞退ともなう評議員の欠員が生じないことが確認された。以上の二件は、10月11日の第3回理事会で報告し承認を得た。

広報委員会

委員長 垣内 景子

広報委員会は、ホームページの管理・更新を主に行なっている。今年度も、通常の更新業務を随時行なった他、様々なお知らせを掲示した。今後は、外部団体からの各賞や奨学金の情報、中国学関係の採用情報、及び各種講演会・研究会等のお知らせ等をさらに充実させ、中国学に携わる者の情報の集積所となるよう工夫してゆきたい。特に、海外に向けた発信力を強化するために、英語や中国語への翻訳の充実を検討している。

将来計画特別委員会

委員長 佐藤錬太郎

将来計画特別委員会は、昨年度、会費の減額等の若手研究者の優遇策について理事会に諮り、意見交換したが、合意を見るに至らず、本委員会で継続審議することとなった。本年度は、あらためて若手研究者の優遇策として、35歳以下の学会費の減免について検討を行った。会議に先だって委員長から次の3案が提示された。

1. 30歳ないし35歳以下を一律に4000円にする。
2. 30歳以下を4000円にし、31歳から35歳までの常勤職に未就職の会員(以下非常勤講師)の会費を5000円にする。
3. 30歳以下を4000円にし、31歳から35歳までの非常勤講師の会費を6000円にする。

1. は35歳以下だと学会費の減収額が大きく、30歳以下だと減免策の効果が小さいため見送られた。現実的には31歳から35歳の非常勤講師の会費減額が妥当とされ、会議では2. 3. 案を中心に検討を行った。問題点として、現在は勤務形態が様々であり、非常勤講師を事務局で把握することは困難であり、事務的に煩瑣になる。会費を減額しても、会員数の増加に必ずしも結びつかない。対象者が少なく効果が小さい、などが挙げられた。また、日本留学時に当学会に入会し、帰国後、海外からの会費納入が困難なため、会費未納による退会者が多く存在する可能性があることから、カード決済による学会費納入を検討すべきだとの意見も出された。

今年度は結論を出さず、若手シンポジウムや、発表者に対する旅費補助など、別の方法も考慮に入れつつ、若手会員の獲得、負担軽減および研究振興について来年度も継続して審議することとなった。

❖ 日本中国学会2014年度(平成26年度) 収支決算書

2014年4月1日～2015年3月31日

(単位:円)

科目	予算	決算	摘要	差額
1. 前年度繰越	¥11,754,849	¥11,754,849		¥0
2. 会員会費	¥10,500,000	¥10,336,954		¥-163,046
3. 寄付金	¥800,000	¥949,734		¥149,734
4. 預金利息	¥1,500	¥2,156		¥656
5. 著作権料分配金	¥0	¥24,000		¥24,000
総計	¥23,056,349	¥23,067,693	(A)収入総計	¥11,344

科目	予算	決算	摘要	差額
1. 事務局総務費	¥2,310,000	¥1,992,302	(1)～(7)	¥317,698
(1)印刷費	¥900,000	¥803,444	「便り」印刷印刷費を含む	¥96,556
(2)通信費	¥650,000	¥711,165	「便り」発送費を含む	¥-61,165
(3)交通費	¥100,000	¥47,840	事務局補佐員交通費等	¥52,160
(4)消耗品費	¥50,000	¥19,496		¥30,504
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥350,000	¥200,357	うち振込手数料¥125,920	¥149,643
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,560,000	¥1,589,000	(1)(2)	¥-29,000
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,229,000	事務局補佐員謝金等	¥-29,000
3. 事務局会議費	¥720,000	¥388,600	(1)(2)	¥331,400
(1)会議費	¥120,000	¥92,750		¥27,250
(2)役員旅費	¥600,000	¥295,850	第1回理事会ほか	¥304,150
4. 事業費	¥5,200,000	¥4,757,198	(1)(2)	¥442,802
(1)学会報等刊行費	¥4,200,000	¥3,757,198	イ～ニ	¥442,802
イ.印刷費	¥2,300,000	¥1,939,680	学会報及び名簿	¥360,320
ロ.編集費	¥1,200,000	¥1,260,000		¥-60,000
ハ.翻訳謝金	¥300,000	¥252,000	英文要旨作成	¥48,000
ニ.発送費	¥400,000	¥305,518	(株)サンセイ業務委託等	¥94,482
(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,000,000		¥0

科目	予算	決算	摘要	差額
5. 各種委員会運営費	¥1,330,000	¥1,085,339	(1)～(7)	¥244,661
(1)大会委員会	¥65,000	¥32,477		¥32,523
イ.通信費	¥5,000	¥977		¥4,023
ロ.会議・旅費	¥50,000	¥26,500		¥23,500
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥780,000	¥725,509		¥54,491
イ.通信費	¥100,000	¥120,362		¥-20,362
ロ.会議・旅費	¥600,000	¥535,572		¥64,428
ハ.謝金	¥60,000	¥60,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥20,000	¥9,575		¥10,425
(3)出版委員会	¥225,000	¥187,630		¥37,370
イ.通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ.会議・旅費	¥200,000	¥172,630		¥27,370
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
ホ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(4)選挙管理委員会	¥120,000	¥100,641	改選年度	¥19,359
イ.通信費	¥15,000	¥10,614		¥4,386
ロ.会議・旅費	¥60,000	¥61,595		¥-1,595
ハ.謝金	¥40,000	¥28,000		¥12,000
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥432		¥4,568
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
イ.通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(6)広報委員会	¥100,000	¥29,000		¥71,000
イ.通信費	¥15,000	¥4,000		¥11,000
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥50,000	¥0		¥50,000
ホ.ホームページ管理費	¥25,000	¥20,000		¥5,000
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥5,082		¥14,918
イ.通信費	¥5,000	¥82		¥4,918
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
1～5 予備費	¥11,120,000	¥9,812,439	支費目としては計上しない	¥1,307,561
合計	¥23,056,349	¥9,812,439	(B)支出合計	¥9,812,439
次年度繰越金	-	¥13,255,254	(A)収入総計 - (B)支出合計	
総計	¥23,056,349	¥23,067,693		¥-11,344

学会基金

基本金	¥4,300,000
前年度繰越金	¥1,035,441
特別会計積立金提出	¥0
預金利息	¥921
信託収益金	¥366
合計	¥1,036,728
日本中国学会賞	¥80,000
日本中国学会若手シンポジウム奨励賞	¥0
次年度繰越金	¥956,728
合計	¥1,036,728

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2015年4月27日
日本中国学会監事

内山精也
加藤敏
牧南悦子

日本中国学会便り 二〇一五年 第二號

Newletter of the Sinological Society of Japan, Number 2, 2015

❖ 日本中国学会2015年度(平成27年度) 予算書

2015年4月1日～2016年3月31日

(単位：円)

	科目	予算	摘要
収入の部	1. 前年度繰越	¥13,255,254	
	2. 会費	¥10,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥1,500	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合計	¥24,056,754	

	科目	予算	摘要
支出の部	1. 事務局総務費	¥2,360,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥850,000	「便り」・封筒等を含む
	(2)通信費	¥750,000	「便り」等発送を含む
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥350,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
	2. 事務局人件費	¥1,660,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,300,000	事務局補佐員謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥420,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥120,000	
	(2)役員旅費	¥300,000	第1回理事会
	4. 事業費	¥5,200,000	(1)(2)
	(1)学会報等刊行費	¥4,200,000	イ～ニ
	イ. 印刷費	¥2,300,000	学会報及び名簿
	ロ. 編集費	¥1,200,000	
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
ニ. 発送費	¥400,000	(株)サンセイ業務委託等	
(2)学術大会運営費	¥1,000,000		

	科目	予算	摘要
支出の部	5. 各種委員会運営費	¥1,230,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥65,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥780,000	
	イ. 通信費	¥100,000	
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥225,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)運営管理委員会	¥20,000	非改選年度
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥5,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(6)広報委員会	¥100,000		
イ. 通信費	¥15,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000		
ホ. ホームページ管理費	¥25,000		
(7)将来計画特別委員会	¥20,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
1～5 予備費	¥10,870,000 ¥13,186,754		
合計	¥24,056,754		

学会基金

	基本金	
収入の部	前年度繰越金	¥4,300,000
	預金利息	¥956,728
	信託収益金	¥1,000
	合計	¥500
支出の部	日本中国学会賞	¥958,228
	次年度繰越金	¥80,000
	合計	¥878,228
	合計	¥958,228

備考(基本金内訳)		
奥野基金	¥500,000	
佐藤基金	¥200,000	
池田基金	¥300,000	
伊藤基金	¥300,000	
積立基金	¥3,000,000	

❖ 学界展望へのご協力(資料提供)のお願い

『日本中国学会報』には、毎冊、「学界展望」が掲載され、またその基礎資料となる文献目録が学会ホームページに掲載されています。これは編集担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆されたご本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号、第68集(2016年10月刊行予定)掲載の「学界展望」の基礎資料として、2015年の文献目録を作成します。2015年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお、すでに2006年から郵便によるご報告は廃止しておりますので、電子メールでのみお知らせください。

論文も著書も一篇、一冊ごとに部門・分野をご記入の上、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

[哲学部門] 湯浅 邦弘 会員(大阪大学)
電子メール: nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

[文学部門] 釜谷 武志 会員(神戸大学)
電子メール: nihonchugoku.bungaku@gmail.com

[語学部門] 森賀 一恵 会員(富山大学)
電子メール: nihonchugoku.gogaku@gmail.com

※アドレスは学界展望報告用のもので、次年度以降担当者が変わっても、引き続き使用する予定です。

各部門の分類は以下の通りです。

- 哲学部門
- 一、総記
 - 二、先秦
 - 三、秦・漢
 - 四、魏・晋・南北朝
 - 五、隋・唐
 - 六、宋・金・元

- 七、明・清
- 八、近現代
- 九、琉球・朝鮮
- 十、日本
- 十一、書誌学
- 十二、その他

○文学部門

- 一、総記
- 二、先秦
- 三、漢・魏・晋・南北朝
- 四、隋・唐・五代
- 五、宋
- 六、金・元・明
- 七、清
- 八、近現代
- 九、民間文学・習俗
- 十、日本漢文学
- 十一、比較文学
- 十二、書誌

○語学部門

- 一、総記
- 二、文字
- 三、訓詁
- 四、音韻
- 五、文法・語彙
 - (古代)
 - (近世)
 - (現代)
- 六、方言
- 七、その他

※国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。

❖ 2015年度 会員動向

●会員動向(2015年11月6日現在)

総会員数1753名、準会員数53機関、賛助会員数13社

●訃報

『学会便り』今年度第1号発行以後、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(敬称略)

近藤 正則(中部地区) 2014年7月19日
 常田 和美(北海道地区) 2014年11月14日
 中田 勝(関東地区) 2015年3月11日
 岸田 知子(関東地区) 2015年3月12日
 中村 璋八(関東地区) 2015年6月2日

●退会会員

○退会申出会員(第1回理事会承認分) 30名2機関1社

石井 清純	石井 修道	石川 正人
板谷 俊生	伊原 大策	大地 武雄
岡田 英樹	岡本不二明	川原 秀城
呉 相武	輿水 優	後藤 理子
古茂田彰男	近藤 和夫	斉藤 道彦
柴 格朗	島森 哲男	下見 隆雄
杉原たく哉	杉本 達夫	鈴木 裕亮
高田 時雄	高橋庸一郎	張 文朝
鶴成 寛子	藤瀬 礼子	真柳 誠
道上 克哉	宮内 克浩	山之内三次

鹿児島純心女子大学附属図書館(準会員)

駒澤大学総合教育研究部外国語部門事務室(準会員)

(株)中華書店(賛助会員)

○退会申出会員(第2回理事会承認分) 12名1機関

上田 弘毅	大滝 幸子	大橋 靖
胡 慧君	小出 敦	詹 秀娟
中鉢 雅量	鶴島俊一郎	中嶋 隆蔵
長谷川好宏	廣川 堯敏	松本 武晃

筑波大学中央図書館(準会員)

○4年間の会費滞納による退会会員 23名

●住所不明会員 9名

王 艶珍	大嶋 隆	金子 久夫
上手 裕子	張 丹鳳	沼尻 俊裕
宮内 四郎	李 宛儒	渡辺志津夫

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください(メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org)。



❖ 2015年度 新入会員一覧

10月9日に開催された2015年度評議員会において入会
が承認された方々は、以下の通りです。

●通常会員 11名

石井 洋美 お茶の水女子大学(院)
伊藤 令子 京都大学(院)
宇賀神秀一 筑波大学(院)
王 連旺 筑波大学(院)
齋藤 成治 國學院大學(院)
武石 智典 北海道大学(院)
田中 京 立命館大学(院)
陳 熙 東北大学(院)
陳 潮涯 大阪大学(院)
董 涛 大阪府立大学(院)
楊 維公 京都大学(院)

●国外会員 1名

史 甄陶 国立台湾大学

●賛助会員 1社

(有)漢字情報システム

なお、以下の方々については6月7日付で開催された持
ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度
の会員名簿に掲載されています。

●通常会員 28名

石丸 羽菜	王 子成	王 竹
何 俊	金 東鎮	樽林 雪子
黒崎 恵輔	河野 哲宏	西念咲和希
鈴木 章伯	関 俊史	関 幹雄
孫 亜秋	竹中 淳	趙 婧雯
張 培華	袴田 郁一	福長 悠
藤井 得弘	藤田 衛	松川 雅信
松村 志乃	蒙 顕鵬	八木はるな
楊 冰	横山 慎悟	李 由
劉 巖		



❖ 事務局からのお知らせ

彙報

2015年度第1回理事会(5月24日開催)での決定事項について、6月7日付で持ち回り評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

【報告事項】

- 2015年度日本中国学会賞受賞者の決定について
[哲学・思想部門]
該当者なし
[文学・語学部門]
西尾 和子 会員
「南宋期における『太平廣記』受容の擴大要因について」
- 新入会員の決定について

また、10月9日に開催した2015年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- 理事長報告
- 各種委員会報告
- 『日本中国学会報』第67集及び会員名簿の発行について
- 学会報編集担当校ほか(2016年度)

学会報編集担当校	金沢大学
学界展望執筆担当校	哲学／大阪大学 文学／神戸大学 語学／富山大学
学会便り編集担当校	九州大学
大会開催校	奈良女子大学

(2016年10月8日[土]～9日[日])

- 会員動向について
- その他

【審議事項】

- 2014年度決算・監査報告
- 2015年度予算案

- 新入会員の承認
- 2015年度総会次第について
- その他

翌10月10日の2015年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2ヶ年(2014・2015年度)未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

◎住所・所属機関等の変更について

転居の際には、速やかに事務局までご通知ください。また、所属機関に変更が生じた場合、特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡くださいますようお願いいたします。

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org



「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に載せることになっています。

2015年1月から12月までに開催された国内学会の原稿は、来年(2016年)2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。お送りいただく電子テキストをそのまま印刷します。校正はありませんので、あらかじめご承知おき下さい。

shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp (九州大学・静永 健)

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。手書きの場合は電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢字・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。但し、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所にも明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができ。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校 正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜 刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

そ の 他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）

（平成13年5月13日修正）

（平成14年10月13日一部修正）

（平成15年10月5日一部修正）

（平成19年10月7日一部修正）

（平成20年5月17日一部修正）

（平成21年10月11日一部修正）

（平成22年6月6日一部修正）

（平成22年10月10日一部修正）

（平成23年10月9日一部修正）

（平成24年10月7日一部修正）

（平成25年3月31日一部修正）

（平成25年10月13日一部修正）

「次世代シンポジウム」についてのアンケートのお願い

理事長 土田健次郎

本学会では過去、二回にわたって「若手シンポジウム」あるいは「次世代シンポジウム」の名称のもとに若手研究者中心の研究発表会を挙げてまいりました。その概要は本学会ホームページの当該項目に記載されております。

今回、前二回の実績をもとにして、今後かかるシンポジウムが必要であるか、もし必要であればどのような形で展開をしていくべきかを定めるために、次世代当事者のお声を聞くべくアンケートを実施したいと存じます。また前二回は「シンポジウム」と冠しておりましたが、実質的には個別発表が軸でした。このたびは本来の「シンポジウム」あるいはそれに類する形態を模索したいと思っております。

ここに会員各位の積極的な提言をお願いいたします。年齢を特に制限するわけではございませんが、特に大学院在学の方を含め若い会員の積極的な提言を歓迎いたします。

なおもし次回を実施するとすれば、2016年度(2016年4月～2017年3月)になります。また実施した場合の成果は、学会ホームページにおいて業績として見られる形での公開を検討しております。

アンケート項目は次の通りですが、書式は自由です。なおこのアンケートについては先日の2015年度大会の総会でもアナウンスさせていただきました。

アンケート項目

1. どのような方式がよいか（例：シンポジウム、3名前後のパネラーによる比較的小規模のパネルセッション、その他従来無かった方式など）。
2. いつの時期がよいか（例：大会時、3月の入試終了後あるいは卒業式前後、など）。
3. どのような題目が考えられるか（大きなテーマでも、絞り込んだテーマでも可。今まで無かったテーマでも、古典的論題を再検証するものでも可）。
4. 題目とともに具体的メンバーが想定できるものがあればお書きください。ただし実施することになっても、そのメンバーの範囲に拘束されるものではありませんし、実施時に改めて募集いたします。

締め切り：2016年3月31日

提出先：メール(info@nippon-chugoku-gakkai.org)

郵便(〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館 日本中国学会)

上記のどちらかをお願いします。

先日の総会の時に申し上げましたように、ご提案を参考にして次回の「次世代シンポジウム」をどのようにするかを2016年度第一回理事会で決定させていただきます。